

夢に出た天文台

白くかすみかかる上り坂
見上げたところ 大きな丸い黒影

幼い頃見た天文台
夢に出てくるたびに
遠い故郷の山の中
なかなか行けずに忘れてた

見たのは確か 学校の遠足だった
友達の顔も 思い出せない頃
それまで一度も見たことがなかった
目が釘付けになる 衝撃の建物

夢の中 吸い込まれてく
その大きなドームに
大人になった今でも

わかってたその正体
故郷帰ればいつでも見れる
思いながらも行けなかった
夢見るたびに行こうと思ってた

あれから過ぎた 50年の月日
自分と同じだけ生きてきただけに
いたんだドームも輝きがなくなり
共に衰えた力を感じる

でもわかっている 長いその働きを
新しいドームにたくすように

主力を譲って見守っているような
そんな優しさと頼りがい感じて
夢に出ていた 人を飲み込むような
おそろしい姿はもうなくなってた